

# 千葉大学園芸学部のキャンパスと庭園

千葉大学大学院園芸学研究科・教授 藤井英二郎

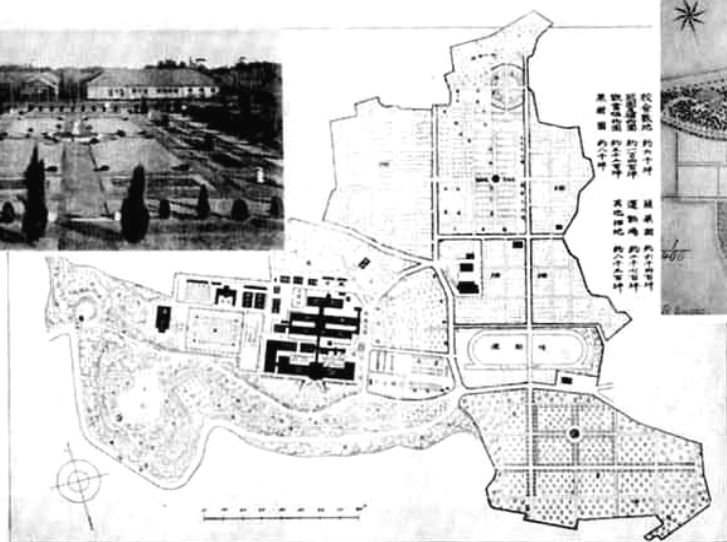


図2：大正6年頃の千葉県立高等園芸学校キャンパス彩色平面図(湯浅四郎助教授測量・作図)

図1：大正13年当時のキャンパス全体図

## 1. 千葉大学園芸学部とキャンパスの沿革

千葉大学園芸学部は、明治42年(1909)4月の千葉県立園芸専門学校開校に始まる。大正3年(1914)4月千葉県立高等園芸学校に改称され、昭和4年(1929)5月文部省に移管されて官立千葉高等園芸学校となった。戦時下の昭和19年(1944)4月には千葉農業専門学校と改称されたが、終戦後の昭和24年(1949)5月には千葉大学に統合されて園芸学部となり、平成19年には千葉大学大学院園芸学研究科となり今日に至っている。

園芸学部キャンパスは、千葉県松戸市の南西端に位置する戸定ヶ丘にあって、その西を北から南に流れ下る江戸川を眼下に対岸の東京、さらには富士山が遠望できる位置にある。戸定ヶ丘は中世の城址であり、江戸時代は水戸徳川家の領地であって、領国・常陸と江戸をつなぐ水戸街道沿いの要衝であった。戸定ヶ丘の西北部には15代将軍徳川慶喜の実弟・昭武が住んだ戸定邸(重要文化財)が現存し、園芸学部キャンパスはその東南に接している。戸定邸庭園は明治17-20年に造営された我が国初期の洋風庭園であり、一方園芸学部には明治43年から大正3年に造営されたイタリア・フランス・イギリスなどの本格的洋風庭園群があって、戸定ヶ丘には草創期の洋風庭園が展開していた。

## 2. キャンパスの構成

当初の面積約15haのキャンパスには、西側に校舎・温室と庭園が配置され、東側に付属農場として露地の花卉・

野菜圃場、果樹園・樹木園が展開していた(図1)。その後、校舎の増改築に伴って温室は東側の圃場区画のほぼ中央に配置され、さらに多くの温室が圃場の多くに展開し今日に至っている。蔬菜や果樹などの圃場内にはそれぞれ研究棟が建てられ農場と研究室が一体となった、いわゆる「松戸方式」と呼ばれる教育研究体制が展開された。つまり、極めて実践的な教育研究が特徴であった。なお、温室群の東端に現存する観賞温室(写真1)は昭和10年竣工で昭和12年竣工の名古屋市東山植物園温室(重要文化財)より古い。キャンパス内の付属農場は、平成3年柏に移転し、旧農場区域は各研究室の実験圃場として今日に至っている。なお、柏農場は、現在TX柏の葉キャンパス駅から至近な立地を活かして東洋医学診療所・予防医学研究センターと園芸療法・機能性植物生産・都市園芸を融合させた環境健康フィールド科学研究センターとなり食と緑に健康を加えた新たな展開を図っている。

正門はキャンパス西端の低みにあり、東に向かって戸定ヶ丘を切り通した坂道をクスノキの大木の木立を見付きにして登り切ると、左手には東に向かって高さ約3mの法面が続き、法面上部にはフランス式庭園が展開し、一方右手にはイギリス風景式庭園が広がる(図2)。法面に沿って東に進むと、園路は緩やかに南に迂回する。迂回する園路の左側は1~2mほど高くなっており、その法面にはロックガーデンが東に向かって連なる。園路の右手、ロックガーデンの向かい側は南下がりの斜面林で樹木園となっている。園路がもっとも南側に迫り出した位置に車回しがあり、そこ



写真1：昭和10年造成の観賞温室



写真4：現況の日時計花壇とタギョウシヨウ



写真2：イタリア式庭園日時計から当時の校舎玄関



写真5：80種もの樹種からなる世界最多の混ぜ垣の現況



写真3：バラを絡めた四阿と牡丹園(大正13年)



写真6：イタリア式庭園西端の第2代赤星朝暉校長胸像  
(高村光太郎作・昭和11年設置)

から北に向くと、中央に日時計を配したイタリア式庭園があり、その向こう正面に校舎玄関を望むことになる(写真2)。

校舎群の中には洋式と和式の中庭があり、さらに校舎群の東側には牡丹園があったが、研究教育棟の増改築によって今はなくなっている。この牡丹園にはツルバラを絡めた六角形の四阿(写真3)があって、大正13年初夏にキャンパスを訪れた与謝野晶子が詠んだ多くの短歌の一つに次の歌がある。

二三人紅き野薔薇の傘形のあづまやに入りよく笑ふかな

### 3. イタリア式庭園

上述した車回しは、イタリア庭園を特徴づける樹種の一つであるトベラで縁取られた円形広場となっており、その北側にイチヨウ二本が植えられている。このイチヨウはロ

ックガーデンからイタリア式庭園に入る区切りで、正面に日時計(大正4年卒業生寄贈)を中心とする整形式庭園があり、この庭園より一段高い位置に校舎玄関があった。つまり、校舎が建つ地盤、日時計を中心とした地盤、さらにロックガーデン南側の園路の地盤という3段のテラスが造られ、それらテラスを車回しの円形広場から日時計、玄関へと軸線が貫き、その軸線を中心に左右対称の幾何学式庭園が構成されていた。これが傾斜地の多いイタリア式庭園の特徴で、明治43年竣工のこの庭園は日本最初のイタリア式庭園である(写真4)。

この庭園は、校舎正面を飾る庭園であることから「前庭」と通称され、校舎の南裾に東西に連なる混垣は西洋庭園に特徴的なborder planting(植栽)で、80種もの樹種からなり、「園芸学校式混垣」とも呼ばれる世界最多の混垣である

(写真5)。日時計周りの模様花壇を縁取るタギョウショウは地中海のアレポマツを模しており、庭園の東南に見られたシュロの古木はイタリア式庭園を特徴づける種類でもある。

イタリア式庭園のほぼ中央南側には昭和7年設置の移管記念碑があり、また庭園西端には移管に尽力された第2代校長赤星朝暉の胸像が昭和11年に設置されている(写真6)。胸像は高村光太郎作だったが、第二次世界大戦時に供出されてしまったため、現存する胸像は新潟県加茂農業高校にあった竹内弥三郎作の赤星像をもとに昭和26年再建したものである。

#### 4. フランス式庭園

明治43年に起工し45年に竣工したフランス式庭園は、フランスのヴェルサイユ宮殿に代表されるフランス平面幾何学式庭園をモデルとした「沈床庭園」sunken gardenである(写真7)。周囲より一段低く掘り下げた沈床庭園とされたのは、幾何学式構成の全体を俯瞰しやすくするためである。但し、庭園を構成する樹木が大きいと庭園が小さく見えるため、樹高を低く抑える剪定がほぼ百年に亘って為されてきている。庭園を取り囲む百本を超えるチャボヒバのトピアリーは樹高1m強の円筒形で約百年に亘って透かし剪定されてきた和洋折衷樹形として極めて貴重である。また、庭園の南と北を仕切るスタンダード仕立てのトゲナシニセアカシアは、明治44年日本で初めて庭園論を講義した



写真7：昭和4年当時のフランス式庭園  
四周を取り囲む小さな円筒形樹形がチャボヒバ、その左右列背後の球形樹形がトゲナシニセアカシアのスタンダード樹形、正面奥がユリノキ並木



写真8：大正天皇即位大典を記念して大正4年に設置されたフランス式庭園中央のフラワーベース(現況)



写真9：大正15年10月の昭和天皇皇太子時代の行啓(フランス式庭園)

初代校長鏡保之助がドイツから導入した樹種である。さらに、東を限るユリノキ並木は樹高30mにもなる樹木を8m程に抑制しながらチューリップのような大きな花を着けるように維持されてきた。

庭園中央のフラワーベース(写真8)は、湯浅四郎助教授の設計で大正天皇即位の大典を祝って大正4年に設置され、また庭園四隅の小振りなフラワーベースは大正6-9年卒業生の寄贈である。フランス式庭園の西側、講堂との間の噴水は昭和天皇即位の大禮記念である。キャンパスには大正、昭和、平成の各天皇が皇太子時代に行啓されており、上記のフラワーベースや噴水は三代に亘る行啓を偲ばせるものである(写真9)。

フランス式庭園の西に位置する講堂の東側ファサードの中心はフランス式庭園の東西軸より北側にずれており庭園の軸線とは合っていない(図2)。前述したようにフランス式庭園は明治45年竣工であり、講堂は大正3年起工、4年竣工であるから、フランス式庭園の軸線に合わせて講堂を建てることは十分可能だったが、講堂南側に半円形の広場を確保することを優先させたと判断できる。ヒマラヤシダで自然に縁取ったこの広場からは南側にイギリス風景式庭園が俯瞰でき、講堂位置の決定ではこのことがフランス式庭園の軸線と一致させることよりも優先された。因みにイギリス風景式庭園は明治45年起工、大正3年概成であるから、大正3年起工の講堂はフランス、イギリス両庭園竣工の後、両庭園との関係を考えながら、その位置や地盤高、向き、ファサードが決められたことがわかる。これら一連の設計を主導した林脩巳助教授は、建築に先駆けて庭園を設計することの重要性を当時の建築雑誌で論じている。そして、フランス式庭園と講堂との軸線のずれを緩和するための植栽の一つとして、イタリアンサイプレスの対植が植栽された。

#### 5. イギリス風景式庭園

イギリス風景式庭園が造られた台地は今より3m程高かったのを明治45年から実習で切り下げ周辺に土盛りして平坦地を広げるように造成された。3mも切り下げた理由は、講堂正面南側のヒマラヤシダに囲まれた半円形の広場から俯瞰するためと、広々とした平坦面を造るためであっ



た。広々とした芝生に緩やかに弧を描く園路が配され、中高の芝生地とともに広さが強調されている(写真10)。芝生地の西南端には四阿があって東京を眼下に富士山が遠望できた(写真11)。四阿は、講堂南広場から正面より右手に見え、その近くの斜面上部には針葉樹が植栽され、芝生の広庭を縁取っていたサクラ類やクスノキの樹冠の中で視線を四阿や富士山に誘導するものであった。

芝生地の東、南、西に広がる斜面上部にはそれぞれクスノキ、サクラ類、コナラが植栽され、斜面中部にカシ類、斜面下部東にコナラやカツラ、南から西にスダジイが植栽され、立地に合わせた細かな樹種選択が為され、今では自然林の様相を呈している。自然林再生の先駆けとされる明治神宮の森が大正4年の造成開始であり、それに先駆ける樹林造成である。

## 6. ロックガーデン

日本のロックガーデンは、その嚆矢とされる明治20年代



写真10: イギリス風景式庭園南部の現況



写真11: 講堂南側から俯瞰したイギリス風景式庭園(昭和10年当時) 右手奥に四阿が見える



写真12: 日本の枯滝石組みに耐乾性植物を植栽したロックガーデン(大正3年造成)

末造成の五百城文哉の庭やそれに続く東京帝国大学日光植物園(明治35年開園)が岩山の各所に高山植物を配するものであるのに対して、大正3年造成の本キャンパスのロックガーデンは日本庭園伝統の枯れ滝石組みに乾燥に強い植物を配した点に特徴がある(写真12)。換言すれば、前二者が西洋のロックガーデンを踏襲した植物学的庭園であるとすれば、後者は景観構成をも意図した日本的ロックガーデンの端緒と云えるものである。

## 7. 設計と造成・管理

上記の各庭園をはじめキャンパス全体の整備は、明治42年開学時から庭園実習を担当していた林脩巳助教授の主導のもと学生実習で進められた。林は、日本における園芸学の創始者・福羽逸人のもとで新宿御苑の整備に関わったのち、イギリスに留学し、帰国して明治41年岩崎家高輪別邸(現開東閣)の庭園を設計・施工し、翌年本学に着任した。その優れた造園技術は、園芸学部キャンパスはもとより、上記の開東閣庭園や成田山新勝寺庭園などに見ることができる。

林の後、大正12年以降はその教え子である森欽之助、穂坂八郎、浅山英一、飯島亮をはじめとする多くの教授が引き継ぎ、園芸学部の実習教育と研究の場としてキャンパスの基本的構成と庭園群、樹林が今日まで維持されてきた。園芸学部は今年で開学百周年を迎えるが、戸定ヶ丘のキャンパスは園芸に関する教育・研究のメッカとして日本の園芸学史を実感できる場である。

キャンパスでは近年新たな展開が始まっている。戸定有志による「庭園ボランティア」活動や学生による「松戸キャンパスをよくする会」の活動はすでに15年に及び、さらに近年では隣接する戸定邸とキャンパスを繋ぐ市民による「緑の回廊ツアー」、「与謝野晶子の歌碑を建てる1000人の会」など、卒業生や学生、市民などに、その価値を再認識し保全・維持しようとする動きが活発になっている。

一方、平成21年(社)日本造園学会は本学キャンパスを日比谷公園や新宿御苑などとともに「近代造園遺産」として選定した。また、近代園芸学の教育研究が展開したキャンパスとして国の名勝に指定しようとする動きもある。

### ●引用文献

- 石井匡史(2003) 千葉高等園芸学校における造園教育とキャンパス形成との関係、日本庭園学会10周年記念論文集、90-93
- 与謝野晶子の歌碑を建てる1000人の会編集(2008) 晶子の花続く丘、千葉大学園芸学部友の会発行
- 藤井英二郎(2005) 建築と自然環境との関係再生、建築雑誌120(8)、18-19
- 林脩巳(1910) 庭園築造の心得、建築雑誌280、202-204
- 須田歩・趙炫珠・李宙堂・藤井英二郎(2009) イタリアンサイプレスの対植による幾何学式庭園に対する眼球運動の変化に関する研究、ランドスケープ研究72(5)、印刷中
- Tamura, Tsuyoshi(1935) Art of the Landscape Garden in Japan, Kokusai Bunka Shinkokai, 165
- 寺門寿明・田中正史編(2000) 五百城文哉展-旅路の心・山中の夢、水戸市立博物館発行
- 戸定会会報2009、千葉大学園芸学部戸定会編集・発行